

二〇一九年一〇月一八日

終活の話が尽きぬ老の秋
秋夕焼写真撮る間もなく褪むる
露天湯の湯煙霧に紛れけり
寸土なく古し石垣石路の花
新蕎麦や並びてふたり昼の酒
歴年の汗の滲みたる力石

二〇一九年一〇月一七日

霧飛んで山あいの村まだ覚めず
新米の幟林立道の駅
露天湯や君も湯治か枯蟻螂
翁の碑訪はん紅葉の御堂筋
あかぎれの指より外す指輪かな
天高し屋上三百六十度

二〇一九年一〇月一六日

病室の窓の狭庭に小鳥くる
雨風の音に寝つけぬ夜の長し
甌岩上りきれずに秋の蝶
川底の磊々見せて水澄める
新藁は土俵用らし宮忙し
小春日や妻と仲良く庭手入れ

二〇一九年一〇月一五日

採り忘れに非ず茶色の種オクラ
岩田帯授かるによき小春かな

明日香

明日香

素秀

うつぎ

もとこ

はく子

うつぎ

やよい

やよい

菜々

なつき

はく子

やよい

よう子

菜々

ぼんこ

うつぎ

せいじ

こすもす

宏 虎

白雲を捉えんと伸ぶ竹の春

豊年や俵型なる力石

川べりに隠れし稚魚や草紅葉

二〇一九年一〇月一四日

弁当棚みんな売り切れ台風来
台風一過山車に跳ね跳ぶ男衆
皆元気よと一筆箋柿の秋

二〇一九年一〇月一三日

丘の上の家積み木めく秋夕やけ
ノアのごと家族で籠もる颱風裡
嵐過ぎたぞと朝窓小鳥来る
一塵もなき大空を鳥渡る
烏瓜これより奥は獣道
深呼吸台風一過の空仰ぎ

二〇一九年一〇月一二日

新米と母の糠漬け日本一
筆硯の庵に射し込む十三夜
稲架襖休耕田と隣りあひ

毎日句会みのる選・二〇一九年一〇月二〇日

はく子

菜々

智恵子

よう子

たか子

菜々

菜々

せいじ

明日香

みづき

かかし

満天

智恵子

愛正

三刀